

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木優子

42

そして火曜日の夜がやってきた。

18時、優子はそそくさと仕事を切り上げると、今夜のために準備していた薄いグレーのシフォンのスカートにはき替えた。

朝、自宅を出た時点で、万が一にそなえて、下着も新しく購入したものに替替えている。

太ももの内側とウエストにいつものお気に入りの柑橘系の甘すぎず、スパイスすぎないコロンをつけると、化粧室の鏡に極限まで近づいて、自分の顔を間近から入念に確認した。

眉毛よし、マツエクよし、アイライナーよし、鼻毛なし、テカリなし、歯磨きよし、口臭なし、リップラインよし、口紅よし、グロスよし。おそらく、今夜、はじめて和樹とキスすることになるだろう、てか、キスしたい。そう意気込んでいる自分に気づいて、優子はクスッと笑った。

こんなにワクワクするデートはいつ以来だろうか？

夫と二人きりでドライブをすることなどもうないし、結婚して以来、夫以外の男性とキスするのも初めてだ(つてまだしてないけど)。しかも、相手はあの、かっこいい和樹なのだ。

一方、和樹も今夜のドライブのために気合いが入っていた。珍しくデパートで買った二張羅のグレーのスーツを着て、Yシャツは薄いピンク色だ。普段は白いシャツしか着ないのだが、相手があの若くてかわいい優子だと思えば、自然にこの色のシャツを選んでいた。

和樹は職場のトイレの鏡に極限まで近づいて、入念に自分の顔をチェックした。

寝癖なし、目やになし、鼻毛なし、歯磨きよし、口臭なし、優子とキスすることばかりを考えていたせいで、危うくトイレの鏡にキスするところだった。そんな姿を同僚に、いや、誰かに見られたら大変なことになるぞ、そう考えて、和樹はクスッと笑った。

こんなに機嫌がいいのは、いつ以来だろう。

あの憧れの優子とドライブができるのだ、おまけにキスも(つて、まだしてないけど)。

(続く)